



隨筆

交通今昔譚(一)

安岐良

京都の巻

京は三條の橋の上ならで、京都驛某旅宿の店先で老齢の自動車を呼び止められた、價の掛合もまとまつたから身を躍らして車中に收まつた、スタートを切れば愉快此上なき感がしたが東海鐵道本線の踏切では脳貧血を惹き起しそうな動搖を感じしめられた、「旦那はん此

ら大阪府北河内郡樟葉村の府界までが京都府の方でありますか其長さは三里半幅は廣い處が二十一米狭い處が十一米とか聞きました、鳥羽の大橋と御幸橋はとても立派で通るたびごとに驚きます、大阪の方は幅も狭いが工事も悪いどす御氣をつけて見ておくれやす」と間はず語りに氣をひかれ窓から處は工事中だによつて少しばかり我慢して下さい」とハンドルを廻はしながら運轉手は挨拶するのであつた。「京阪國道は此春改築したとの事であるが其國道は何處からか」と聞くと「今少し行くと其起點である」となる程上鳥羽に入るとそれは／＼立派なもので走るわ／＼しかし高級ハドソンでも老ひぼれ車であるによつて二十五六哩の以上は出ないので乗心地は此上なしである、車内から桃山御陵を遙拜し、進むが程に御幸橋にさしかゝつた、長さが三町もあるらうか鋼鉄桁橋で先刻運轉

手に聞かされたよりは立派な橋だ、橋上は車を下り歩行した、鴨川と淀川との合流點の上方で橋を渡つて、突き當りが右清水八幡社で西山の山姿は綠翠滴たらんばかりである、橋には警戒標方向標などの設けが見られ照明用ハイウエイユニットも取付けてあつて頗ぶるモダーンな橋である、再び自動車内の人となつた、運転手がまたもや「旦那いかがで立派ではありますんか」と自慢する、「君實に自慢してよいお客様を乗せたらせいぐ」此橋を自慢してやるがよい」と、げきれいしてやつた、橋本をすぐると京都大阪兩府の界である、運轉手が「是れから大阪府下どす氣をつけて見て下さい」と成る程道幅も狭くなつて鋪装も簡易である、夫れども

牧野で土手の松を移植せずに道路の中央に取り残して居るのはうれしきことである、よしあしの茂り合ふ淀川の緩流を右に見て樟葉、枚方、庭窪を經、守口で大阪市内に入り、今市を通りて改修道の終點に着した、とともにかくにも淀の流れに沿ふて堤防上を疾走し來た氣持のすが／＼しさは、ゑも言はれぬ、時計を見れば一時間位であつた、大阪の分は道幅は五間から、十間餘で長さ六里位と思はれた。やがて天満の橋を渡り大阪市内を経て尼崎に出た、橋を渡り大阪市内を経て尼崎に出た、之れから阪神國道である。尼ヶ崎々々太閤記十段目十次郎の別れの注進、秀吉の出現など不合理至極な場面の演劇など思ひめぐらしながら窓外に目をみ

手に有馬の温泉がある、それから東へ廻りて小林一三氏の手腕に待つ寶塚、其處の少女劇など思ひ浮べて居る内に何時しか神戸の市内に進み、榮通を相生橋に出た、數年前とはがらりと其姿をかへて居る、湊川神社前を走りて舊湊河跡に着いたが今は古戦場の思い出物すら見出しえない、湊川よ此處古戦場は忠臣義士の事に死せる者前後算なく其名を千載の後に残すもの幾何かある、さわれ、新戦場の夫れは餘りにあざやかな生活戦の場所である、シネマ、演劇、福原の遊廓、唯私利私益の爲め

に奮闘し、彼は斃れ此は死するの慘状、うたゞ無量の感を禁する能はざるものがある、山河の變もまた甚しいが、人類社會の變化も著しいものなき身となり徒行して湊川神社に詣づ、神殿は改築中であるが楠氏の墓は舊に依つて亦新なるを覺えた、群鳩は棟から地へ、地から棟へ其可憐な姿を上に下に轉じてある。時に時計を見れば大阪より時餘である、京都を出て半日足らずの行途、今更ながら道路改良の效果の大なるを痛感したのであるが、今を距ること七十年前文久三年頃の交通の状はどうであつたであらうか、限山先生の歸南日記の一節を閲すると簡約ではあるがつぶさに當時の道路の不便が

思はせらるゝ、之を摘記すると斯うである、『文久三年四月朔日申の刻京を發す、此夜桂川の西宿に宿る、雨未だ霽れず、泥行極めて艱難を極む、初め京を出づるの時、衆、宿を山崎に擬す、東寺に至りて日既に暮る、戸を叩いて宿を乞ふも得ず、衆殆んど窮す、轉じて數村を移り桂河に至り書を村長に寄せて宿を得たり、書に夜二更。同二日雨尚ほ歇まず、行いて山崎驛を過く、山崎は帝都の咽喉、皇城の外廓にして西南第一之衝地なり、西に天王山あり、東に男山あり、兩山相距ること十五六町許、濱河其間を流れて末流攝海に入る、天王山突没連延として去り須磨に至る而して男山に絶すれば則ち山勢南下し東南諸山と相對す、便ち其要

思はせらるゝ、之を摘記すると斯うである、『文久三年四月朔日申の刻京を發す、此夜桂川の西宿に宿る、雨未だ霽れず、泥行極めて艱難を極む、初め京を出づるの時、衆、宿を山崎に擬す、東寺に至りて日既に暮る、戸を叩いて宿を得たり、書に夜二更。同二日雨尚ほ歇まず、行いて山崎驛を過く、山崎は帝都の咽喉、皇城の外廓にして西南第一之衝地なり、西に天王山あり、東に男山あり、兩山相距ること十五六町許、濱河其間を流れて末流攝海に入る、天王山突没連延として去り須磨に至る而して男山に絶すれば則ち山勢南下し東南諸山と相對す、便ち其要地を檢すれば山に依り水に副り連碧以て海濱に達すれば則ち内防略は成る。醜虜一朝寇を我に爲して浪花守を矢する時は安危遂に此に在り、夫れ豈に之を忽にすへんや。然して此天驗を指して治せざるものは何ぞやと。予昨洛を去り尙山城の界に在り、心中稍慰むる所あり。今之を過ぐれば則ち城洲の地にあらず、嗚呼思と觀と一も吾心を慰むるものなし豈に長太息すべきにあらざるか、東の方遙かに石清水を拜し國風を詠す。死なむ身の今は何をかいわしみづきよき心は神ぞ知るらむ。と櫻井の驛につきて。色々香も其枝ながらのこしけむ吉野に匂ふ櫻井の花。此夜は西宮に宿る、予窮縮す乃ち酒を呼び諸人に勧め暗に訣飲を爲す、諸人

之を知らざるなり、同三日午時兵庫に至り楠公の墓を拜して告くるに皇國の難を以てす。予初め京を出づるの時意は死にあらず、赤心を自するを以てするなんば碑前に擬して死なんと。心尙未だ決せず、其西宮に宿するや心、稍決然たるものゝ如し、徹夜眠らず、悲寂自ら絶へず、今碑を拜するに及ん

で總身寒粟して顔燃ゆるが如し前日の悲寂は朦朧として夢の如く悲しまんとして悲まず泣かんとして泣かず胸中自から豁然たり、而して意氣慨奮亦自ら禁する能はず、是に於て心即ち決す云々と筆者此一節を誦して隈山先生、義憤の意中を忖度し一文を草す則ち、『此夜隈山は附人の寢息を覗ひ、宿をぬけ出て、唯獨り、ひそかに來るは湊川堤、今は昔となりたるが水も人目もかれ果てゝ暗さは暗し闇の夜、手さぐりにして、嗚呼忠臣楠氏の墓と用意の清酒を墓前に供へ、遙かに下つて兩手條河原に曝らせしも皆な我が同志な

て朝家の逆賊、彼の足利三代の首を三條河原に曝らせしも皆な我が同志なり、正成公よ、我が藩忠烈の士、まことに多しと雖、時事皆是れ非にして事、かに左近衛中將正成公、御身こそは建武、南朝の功臣、我は幕末勤王の志士、時を隔つる事五百年、身分に高下はありといへど、一死を捧げて君國のために、盡す誠にかはりはござらぬ、公が勅召に蹶起して笠置の行宮に赴かれしは拙者が違勅に憤激して、逆臣の頭を切らんとせし意中に同し、不幸にして能はず、和の宮を降して以て關東逆臣が唯一人の皇妹をすら庇蔭し給ふこと能はず、和の宮を降して以て關東逆臣の婦となし、憂愁の雲を隔てゝ相望みながら、而かも朕は骨肉の愛情を以て洋夷の侮辱に甘んするを得ず、と、誰か聖衷を仰いで涙下ざるものあらんや、我藩公も公武合體を説く、あゝ、千辛萬苦も將に水泡に歸せんとする、

憂國の志士、相次いで獄に下り、倒幕の事、日に日に遠ざからんとす、間に乘じて、はびこる洋夷、我か神國を犯さんこと火を見るよりも明かなり、斯くては、いつか宸襟を安し奉り、いづれの日か國家を泰山の安きに措くを得べき。敗衄して今、何ぞ經綸を論せんや、されど事を大楠公の墓前に告げて我が終焉を潔くせんと欲するのみ、素より他意あるにあらず。我家男兒に乏しく、公が三代の忠勤に倣ふこと能はずといへど、魂魄永く皇城を遙つて克爲め、國家の爲め、左近中將正成公、陪臣義比が吐きつくしたる肝膽の熱血、幽明を超へて、みそなはし給ふや否や。「よすがなき思をおきて消えなま

し何を小鹿のつかの上の露」とやがてぞ自らむ、東の空、低徊忍びぬ心をはげまして歸る旅宿の門の邊に』憂國の胸中をひそかに忠臣の墓前に私語すると公言して敢て自らを慨世憂國の志士と誇るとは如何に時代を異するといへども彼此較比すべきものにならずと信する。ついぞ脱線した筆の横道。

北海道の卷

熊の棲むてう蝦夷の地、忍路高島及びもないが、せめて歌葉磯谷までとく其七生報國の忠誠に學ばん。大君の行路難を唄はれた北海道、明治二年開拓便を設置して我帝國北門の地へ今を去ること三十有餘年前旅行した予は今尙其當時の旅情を忘ることが出來ない、夏の初めの頃「行春や鳥啼き魚の

目は泪」と之を矢立の初として行道なほすゝまず人々は途中に立ならびて後かけの見ゆるまではと見送るなるべしと書き始めて奥の細道に取りかゝつた芭蕉翁のかしまだちは元祿二年であつたが予は明治三十六年である、上野驛で夜汽車の三等席に身を投げた、大宮宇都宮も何時しか過ぎて行く程に夜は更け假寐の人もありしかど寐られぬまゝに白河と呼ぶ驛で此處ぞ彼の能因法師が「都をは霞と共にいでしかど秋風ぞ吹く白河の關」と詠みにけん處なるかと夜の闇さも覺へず窓を眺めたるといとも笑止であつた、福島をすぎて夜は明け、仙臺では、政岡忠義の芝居や日本三景の松島などを思ひながら北へ北へと進む汽車に聊か疲勞の程を覺へ

始めた、盛岡もすぎ沼宮内と呼ぶ驛夫の聲は聞分け難く、三戸で陸奥の國に入りたるを知る、野邊地驛では八甲田山を仰ぎて雪中行軍遭難の事など追憶し淺蟲と云ふ名には異様な感をした、上野驛を出て二十四時間で漸く本土の最北端青森に到着し少憩の後連絡船に乗り込んだ、一葦對水の函館と云ふも海峡六十浬で對岸は視界の外にある船進むこと時餘にして雲烟の間山峯を視る傍人にあの見ゆる山は函館にあらずやと尋ねたるに其人微笑してまだ／＼あれは下北郡恐山連峯であると教へられたことを思ひ出して、今日尙其輕卒を耻づる、暫らくして船聊か動搖し始む、此處がいよいよ津輕海峡であると知つた、函館港に着船すると知入に迎

へられて一旅館に投宿す、翌日は再び船に乗りて室蘭に上陸す、當時函樽鐵道は未だ布設せられない、札幌行の汽車に乗つた處が車内に小型のストーブが備へられ薪を以て暖を取る、六千萬方里的廣袤を有する北海道とは云へ農學校の爲めに夙に歐米の文化に浴したる地でありますながら斯る設備には一驚を喫したのである、苫小牧、岩見澤、幌別を経て札幌に着した、地の廣闊なる傍人にあの見ゆる山は函館にあらずと其地名などで、先住民族のアイヌであつたことが證せらると思はれた、札幌を立ち退いて室蘭逆行する、途高島忍路は徒步でも行かりよが磯谷歌乘行などは思ひもよらぬのであつた、札幌を立ち退いて室蘭逆行する、途中白老で下車してアイヌ部落を見舞つた、海路釧路に赴かんとして乗船す、夜中の事とて直ちにキヤビンに入りて横はる、睡魔襲來忽ち夢裡に入る、足りて身を起せば船脚靜かにして恰かも身は大廈高樓に臥するものゝ如し、甲板に出て見れば何の爲にか咫尺を辨を耳にして何んだか荒野の中にある感

じ難い、燈を提げて來る船員に「船は今何處の沖なるか思ふよりも平穏な航海である襟裳岬を經たのか」と問ひたるに船員笑ふて「否とよ昨夜からガス非常に濃厚なれば航海極めて危険なる故に出港するを得ず船は今専室蘭港に在り」と答へた。成る程平穏過ぎると思はれたのは此濃霧の爲めに動かざる爲めなるかと思はれた、時十時に近き頃霧や、霧れ始めれば徐ろに錨をあげ出港することとなつた、船量を催したれば死せるものゝ如く臥床してまた起きず、東に奔りて漸く釧路港に碇泊す、はし舟來りたれど波高うして乗り難し衆大に窮せしかど漸くにして陸上の人と爲るを得た。數日の後釧路で汽車に乗り音別で下車す、當時此地

方に於ての全線鐵路である、小憩の後官馬に乗り出で立つ、馬子告げて曰く手綱をゆるくし馬の意に任せよ然ざりば馬進まずと乗馬の經驗なきを見て斯くは教へしならんと唯々として之れに従ふ、矮少な驛馬に乗れば足先時に地に觸るゝにあらずやと憂られた、河水を涉り崖をよぢ漫步遙々として進まずるものゝ如きも午時に大津に達した、少憩の後馬を乗換ゆることゝなつたが、引き出来たのは雜種栗毛のいとも逞しき逸物である、乗ることの難色ありしも強るて乗る馬予を侮りて道草を喰ひ進まんとせず、強く鞭を加ふれば駈け走り止まるを知らざるものゝ如く馬育人なきに似たる思ひあり予は死せん計かりの思ひしつゝ敢て身をそら

して乗る、傍人眼を歎つ、馬走り鞍ありて人なきと見たるにや呵々、日暮るゝ頃帶廣に着したが股間痛みを覺ゆること甚しくして歩むこと能はず、飼餉して漸く座敷に入る、翌朝また乗馬せざるべからざるかと思へば憂きに堪へぬ思ひがする。午前中は疲勞を慰し午時出發す、昨の馬より幾分小なれども官馬にあらで私馬なれば雜種の雌馬なりと助けられて馬上の人と爲る、縋々として進まず、友馬を先きすることに依つて緩歩之に従ふことを得た、行くこと數里、途羅木林地に入る、時に後ろより危いノヽとの大聲を發する耳を認め目を上げて仰ぎ見れば馬の前足は予が頭上に在つて鐵蹄將に落下せん

と思はる、倉皇として落馬し林中殘雪

を泳いで數間を去り頭をめぐらせば予

が乘りし馬は他馬の爲めに皮は裂かれ

鮮血流れて雪を染む、其慘状凝視する

を得ず、鬪争何時やむるを知らざるの

觀ありしが敗馬は忽然身を躍らして馬

首を轉するや否やもと來し路に走り去

つた勝馬は敢て之を追ふことを爲さず

少しく疲勞の色ありしも其馬の客來り

て打ち乗れば平然として前途に進み行

けり、茲に於て予は馬を失ふ、已むなく

徒步林中に一筋の途を辿ることとなり

ぬ、二時間餘り行けるに暮色迫り来る

を覺ゆ、ペケレベツに前途尚幾里なる

かを尋ねんにも更らに行ななし。心中

頗る不安を感じたるも躊躇として足の

進むに任す、漸くにして驛宿に投する

ことを得蘇生の思をした、翌朝は馬に

懲りたれば徒步に決意し途を新内に取

りサオロ岳の麓を超へ落合に向ふ山中

雪尙深く一步を過てば雪腰に及ぶ、行

く程に老幼を伴ふ移民の幾隊に逢ふ、

日没の頃落合に着し直に汽車に乗りて

旭川に着したるは夜の初更なりき、旭

川附近の此處彼處人力車にて往來し數

日の後旭川驛にて乗車岩見澤を經て室

蘭に出て、東京に歸りぬ、國家の爲め

に開拓の進捗を計り之れが爲めに自ら

來往して力を竭さねばならぬと思へど

も其交通の不便に思ひ至れば憂色を禁

する能はざるの情があつた。三十年前

の北海道よ汝の發育は如何ぞや血管で

あり淋巴腺である道路鐵路の發達は如

何昔時の觀を一變したこと、筆を

轉じて現下の情勢を述へん。(未完)

關跡をあとに近江路や視察の箇所は何處ぞ、と京津國道逢坂や蟬丸殿もいやち

こな、義仲寺は見過して木曾塚あたり芭蕉の翁かものしたる「木曾殿と背中

合せの寒さかな」の碑を見て何に栗津の原や膳所の町、石山寺は後まわし瀬

田の唐橋からころと渡る良馬のなき身をば秋に限らぬ月の宵洗堰にとかゝり

ける、石山の麓を漫々と流れ行く瀬

田の川、夜も日も絶へずとうとうと奔

流飛瀑の壯觀を呈しておる之れぞ三年間工作し二十五萬圓の費を要した有名な洗堰なる、流れて盡きぬ水かさは、

一秒時六千立方尺と算せられ、この水

流れ宇治川となり淀川となりて浪花

の浦に注くなり、宇治は平等院の古戰場・浮舟堂など河畔にありと耳にする

だに喜ばし